海外日誌（十五）

Mt. Wilson Observatory, Pasadina,
Calif. U. S. A.

山本一清

九月十八日（火）

今日の天文會合は當市ウイルソン山天文臺本部の圖書室で開かれアダムス氏座長となり、十時から論文が多く發表せられた。ヘール氏よりの手紙の發表と、南米コルドバよりの珍客ペライン氏の演說があつて、閉會。直ちに本部前庭で一同紀念寫眞を撮り、次に、政府館階上で午餐會を開く。自分はペライン氏と同席、いろ〳〵南米のことをきく。

午後は二時から、市内の加州工業學院でアメリカ物理學會との聯合會があつて、皆それに出席した。日日プラスケト氏（父君代讀）の星雲分光論、ストロムベルグ氏の天體運動論などが特に注意を惹いた。

午後六時より、英子と共に、市内の大學クラブで開かれたリク天文臺同窓會に出席。但し、昨夕からバークレーの大火事で、カンベルロイシナー兩氏が急ぎ歸去せられたため此の會に出席せられなかつたのは遺憾であつた。此の席上、スエジー氏の懷舊談（三十六吋建造當時の）は面白かつた。

九月十九日（水）

朝九時、天文臺本部に集合した天文家と共に十數臺の自働車隊を作つてウイルソン山に登る。皆が登り着いたのは正午。十二時十五分、モナステリの裏庭でランチを取り、午後二時から百吋赤道儀室の中央室で論文會を開く。ジョイ氏のミラ星視線速度變化の發見は面白かつた。最後にアダムス氏よりヘール氏の「器械進歩の可能性」といふ長文を朗讀があつて閉會。それからドームの外に出て、一同撮影す。

午後六時よりホテルで晩餐會、それから六十吋と百吋とは來會者に公開せられた。自分は八時半發の自働車で下山、十時歸宅。

九月二十日（木）

朝九時から研究室へ行き、今日からは又元の通り太陽分光寫眞を檢査す。

東京震災の時の日本の新聞が到着した。

九月二十一日（金）

午前中、天文臺本部地下室でニコルソン氏と太陽活動の變化問題について長く話した。

夕方、田村氏に招かれて晩餐を頂き、それから歸途、レイモンド劇場で「一九二二年氣分」を見る。

九月二十二日（土）

今日は太陽活動の週期を計算した。そして可なり意味あるものを發見した。

英子は終日田村氏宅へ行つて仕事をしてゐた。

夜、讀書しながら、勞働問題の原理について大にさとるところがあつた。

九月二十三日（日）

朝十時、松尾氏に迎えられ、自動車でモンテベロに行き、其の地の日本人日曜學校生徒に英語說教をした。それからホイテアの松尾氏宅で午餐をいたゞき、次でデイ牧師と城之口氏とを順に訪問。四時頃まで城之口氏のカーで市内をドライヴし、有名なカレッジや教會堂を見る。四時からは日本人教會で說教。それから又、近くのサンタフエ油田地を一巡した。

夜八時からフレンド教會日曜學校講堂で日本人のために天文講演をし、十枚ばかりの幻燈畫を見せた。夜十二時歸宅。

九月二十四日（月）

十時から研究室。太陽熱の二十七日週期は餘り確かな結果ではない。太陽黑點の表面位置については可なり面白い纏まりを見た。

英子は、午前中、平岩夫人を訪問、午後ロス・アンゲレス行。
夕方、兩人散歩。八時から自分はYMCAへ行き、ヴンデンリンデン君と共に、ロスアンゲレス心理大學のハーン夫人の講演をきく。

九月二十五日(火)
朝から研究室で、太陽熱とカルシウム雲との短期關係の或るものを見つけた。
夕方、田村氏宅を訪問。
海老、中村兩君から東京大地震の手紙が來た。

九月二十六日(水)
朝早く、アパートメント内の隣室に移轉。三十分で終る。
研究室では、太陽熱とカルシウム雲との長年にわたる平均値を比較す。太陽熱に年週變化があるらしい。
英子は朝十時から田村夫人を訪問、午後はロスアンゲレス市へ。

九月二十七日(木)
平常より早く研究室に出て、込み入つた計算をしたせいか、午後三時頃頗る疲勞を覺えたので、歸途、ぶら〳〵コロラド街を歩き、ヴルーマン書店でワイズの演劇學を買つて歸つて讀む。

九月二十八日(金)
本部地下室で太陽黑點と熱量變動とを比較研究す。材料が確かで、且つ、豊富であるから、いつまでも興味が盡きない氣がする。
五時歸宅。食後散歩。

九月二十九日(土)
今日も昨日の續きで、太陽熱と黑點との比較研究に多忙であつた。今日で一九二一年分を終る。
夕方、田村氏方で晩餐をいたゞく。

九月三十日(日)
朝れ坊をした。朝食は十時。
正午から、御辨當携帶で、ぶら〳〵とコロラド街を散歩しながらブルクサイド公園を行つたら、人が多くて大變な賑ひであつた。青草の上に腰を下し、おすしを食べながら半日を愉快に送り、歸途パサデナ劇場で「スポイラー」を觀る。
午後六時から、迎へられて、ロスアンゲレスの日本人のクリスチヤン教會へ行き、二時間にわたつて、天文學の通俗講話を試み、十一時歸宅。

十月一日(月)
午後四時頃まで本館地下室で例の通り太陽分光寫眞の檢査。先日來の研究の結果の目鼻がつきかけて來たので、取り敢へずアボト氏に報告書をかく。
夕方、散歩のついで、ニウヨークの吉田卯三郎君へ電報を打つ。それからコロラド街のストランド劇場で日本より新着の東京及び横濱地方大震災活動寫眞を見る。其の悲慘な有樣は、今更、心を暗くさせた。今日は震災の恰も一ケ月目である。

十月二日(火)
午前中、天文臺本館で一九二二年度分の兩極黑點の距離を測る。
午後は英子と共にロスアンゲレス行き。英子は一先づ學校へ。自分は正金銀行へ立ち寄り、それからスプリング街を通つて、東第六街の小葉竹氏を訪ひ、夕刻、英子も來たのを待ち合はせて、共にパサデナへ歸つた。
夕食後、田村氏宅を訪問。恰も、ハリウドの高岡、角皆兩氏も來られ十一時頃まで話した。

十月三日(水)
今一九二三年初めからのカルシウム雲と太陽熱との關係を調査し、ほゞ前日の結果をたしかめた。それから一九二一年度と一九二三年との兩極の距離測定にとりかゝる。

十月四日(木)
兩極黑點の距離と磁場の強さとの間に一種の關係があることを發見した。午後は本部地下室で黑點各個の生長史を研究す。
夜、田村氏を訪問。英子は出來上つた同氏夫人服を渡した。これで一と息き。

十月五日(金)

終日、本部地下室で太陽黑點の生長史を研究。非常に興味ある事柄であるが、むしろ材料多く、日子足らざるを恨む。
夕食は田村氏方で御馳走。其の後歸宅して、おそくまで勉强す。

十月六日(土)
今日から太陽黑點とガス雲との相關變動を檢査し始めることとする。
夕方、市内散歩。

十月七日(日)
朝、鍵和田氏の自動車にのせられて、ハリウド獨立教會に行き、同所で十二時から開かるゝ、高岡牧師執任記念會に列席、席上、新しく、伴、木村兩氏に會つた。會は大變な盛況で又、御馳走であつた。午後は一旦高岡氏の新宅へ招かれ、夕食後、再び教會へ行き、夜の集會で、「基督教の根本問題」と題し三時間ほど所感を述べた。思ふ事多く時間不足の感があり、ために時々論理をとばし、一般來會者には氣の毒であつたやうにも思ふ。これが當所で自分の最終の時間なのだ。
夜半、送られて歸宅。

十月八日(月)
十一時、「政府館」の階上で開かれた「雜誌會」の打ち合せ會に出た。午後は太陽の活動表面の變動を細密に檢査、殆んど結論の鍵を握つたと思つた!!夕方、結果の纒め方を考へながら、徒歩で歸宅。

十月九日(火)
朝、天文臺へ行つて見ればロスアンゲレスの高木島田兩氏がオフイスに待ち居られた。圖書室などを見せて、暫く雜談。午後、地下室で一九二一年度の黑點の磁力變化を檢査す。
夜、宅でベライン氏の渦狀星雲論をよむ。

十月十日(水)
朝、ガーデンゲ・ロブの伴氏が來訪せられる筈で十一時まで宅に待つてゐたが、見えなかつたので天文臺へ出かけた。(途中、ライブラリ公園で、スター・ニウス社の主催のベースボール試合スコア板を珍らしく見た。中々興味あるやり方であると、ほと〳〵感心。
天文臺で。一九二一年度の黑點の磁力變化の檢査終る。
夜、招かれて、田村氏宅で御馳走。それから歸宅して、ストルーバン氏の最近天文史に目を通す。寒くて、始めて室内のガス・ストーヴを燃やす。

十月十一日(木)
今日は一九二二年と一九二三年初年期の太陽黑點變化を研究す。研究の進渉模樣から見て、當地滯在の日數が足りなささうに思はれ少々あせり氣味である。
夕食に英子はロスアンゲレスからおすしを買つて來た。
夜は火星の表を作つたりする。

十月十二日(金)
今日はコロンバスの新大陸發見記念日で、米國は一般に休日をやつてゐる。しかし天文臺は別である。
自分は太陽熱の黑點による影響の模範例を撰擇す。午後、セントジョン氏の紹介で獨逸ハンブルグ天文臺長ショル氏に會つた赤ら顏の太つた好々爺である。腰も低い。

十月十三日(土)
午前中、研究室で、アダムス臺長に、頃日來の太陽變動研究の大體を報告した。臺長は大へんに喜んでくれた。自分も上元氣で正午一旦歸宅。
午後二時過ぎ、約束により、モネタの江上牧師に迎えられ、自動車に乘せられて、南下。ロスアンゲレス、ガーデナを經てモネタに入り、廣々とした日本人農場を一巡、夕暮時、モネタ教會の側の同氏宅に着。夕食後、同教會堂で開かれる青年共勵會に列席し、一場の天文講話をした。夜は江上氏宅でとまる。
此日、パサデナ市の西に當り大きな山火事があつて、晝の中から恐ろしい烟が空を掩ひ、夜は炎の色が殊に物凄かつた。

十月十四日(日)
朝十一時、江上氏に伴はれてカムプトンの日曜學校に行き、小兒

逢に話した。こゝの小兒たちは特に美しい顏色をしてゐたのが目立つて見えた。田園生活の故だらうか。

お晝頃、少し發熱した氣味なので、食を取らず、江上氏宅の床上で眠つた。四時頃輕快となつたので、外に出て折りから、會堂から各自の家に歸りがけのモネタ日曜學校の小兒たちの寫眞など撮る。

夕方、江上氏と共に自動車で東サンペドロの日本人教會へ行き、伊東牧師等に迎へられ、珍らしい日本食を頂いた後、會堂で二時間の天文講演をした。三百人は確かに集つてゐた。

夜半十一時十二分發の電車で、ロスアンゲレスまでは歸つたが、そこでパサデナ行きの電車を失ひ、止むなく、東六番街の小葉竹氏の宅でとまる。

十月十五日(月)

朝、小葉竹氏に朝食を頂き、八時半パサデナに歸る。それから研究室に行き、一九一九—二〇兩年度の太陽黑點磁極調査をする。十一時半頃、圖書室でドイツ・ハンブルグ天文臺長ショル氏と暫く雜談した。此の人は全く好い御爺さんだ。

午後二時半、ロスアンゲレスのサンタ・フエ驛へ行つて、東部より到着した吉田卯三郎君一行を迎へ、ミカド・ホテルで夕方まで世間話し。それから一富士で夕食を共にし、英子と共に夜十一時歸宅。

今日、ベーのヴンビー氏と、ローエル天文臺のスライファ臺長とから招待狀を受取る。

十月十六日(火)

約束により、朝九時半から吉田卯三郎君を案内し、天文臺用自動車でウイルソン山に登る。アダムス臺長も同乘したが、吉田君と自分とは日本語で大に話しつゝ行く。山上では丁度鐵金中の六十吋望遠鏡や、百五十呎の太陽塔や、スノー太陽鏡、それから暗黑の百吋ドームを手さぐりに見たりしてゐる中に、會々ロスアンゲレス市から登山して來た高木梅軒氏に出會し、紀念寫眞など撮る。

午後三時、吉田君と共に下山。研究室でキング、アンダーソン兩氏の案内で立派な物理實驗室を見た。それから同道してロスアンゲレス市に行き、街頭で別れ、吉田君は旅館へ、自分は三光樓の集會に出席す。

三光樓では、小葉竹、高岡氏等の斡旋で自分等夫妻の送別會が七時から催され、男女二十餘名の出席であつた。十時半、ホイテアの林氏の自動車に送られて歸宅。

十月十七日(水)

午前中、研究室で太陽磁力の研究の續き。

午後二時から、伴武氏に伴はれて、ガーデン・ゲロヴなる同氏の家に行き、日沒前、附近の大農場を巡覽、いかにも大陸的な廣々とした氣分になる、夕食後、集つて來た青年達に天文講話をし、十時半辭去、電車で歸宅。

十月十八日(木)

午前中、一九一八年度の太陽黑點研究。もはや研究も略々結末に近づいたので、今日の午後から On the Influence of Heliographic Activity on the solar Constant といふ題で論文をタイプし始める。

夜、宅で計算中、太陽黑點の磁極と太陽雰圍氣の深さとの間に一つの手掛かりを見出した。

英子は午後、學校で送別會をして貰つたといふ。

十月十九日(金)

今日は、終日、エラーマン氏の暗室で、論文挿入用の黑點寫眞を作る。

夕食は田村氏方に招かれた。

夜、宅で研究を續行、カルシウム班と太陽との量的關係を知つた。

十月二十日(土)

朝十時から午後六時まで、續けさまに、研究室地下室で一九一七—一八年度の黑點研究にふける。夜、之れを宅で計算して見たが、此の年度は太陽活動の旺盛期なので、現象が餘り復雜に過ぎ、一九二〇—二二年度のやうな一目瞭然たる結果が見えない。

十月二十一日(日)

朝十一時、パサデナ合同教會で「福音の眞理」と題して說教。ミス・

クラークが來聽してゐた。

午食と夕食とは田村氏方でいたゞく。夜、また敎會に集まり、自分等の送別會が開かれる。席上自分は「基督信者の責任」と題して所感を述べた。十時歸宅。

十一月二十二日(月)

朝から宅で論文のタイピング。夕方までに大略終る。

午後、研究室に出かけ、暫くニコルソン氏と太陽黑點活動に關する意見を交換する。ニコルソン氏は頗る用心深い保守論者だ。

いよ／＼パサデナ出發を來る木曜日と決定。

十一月二十三日(火)

朝十時、天文臺で偶々アボト氏に會ひ、未完のまゝの論文を一度通讀して貰ふことにした。それから、自分は室で水素班の寫眞など整理した。天文臺では、ジョイ氏がミラ星の伴星を發見したとて大評判。

夜、平岩氏夫妻來訪。

英子は、今日限り、學校は止める。

十一月二十四日(水)

朝、アボト氏より論文を受取り、之れに寫眞を添えてアダムス臺長に提出す。それから後事をミス・ハーウドに引き繼ぐ。

午後は四時から天文臺政府館樓上で雜誌會に、CGアボト氏は恒星の熱線觀測結果を報告した。それから宅で荷送り。夕方、ウオターハウス、田村兩家へ暇乞ひに行く。

十一月二十五日(木)

朝早くから宅で荷作り。九時から天文臺へ行つて、日本とボストンとへ送る荷物の仕別けをし、それから別れの挨拶のため各室をまはる。

正午歸宅。大荷物をステーションへ運ぶ。

午後二時いよ／＼パサデナ出發。先づ電車でロスアンゲレスの小葉竹氏方へ行き、暫く、買物のため、市街をあるき、それからサンタ・フエ停車場に着。見送られて、午後五時ミシヨナリ號に搭乘出發。—すぐ日沒、寢臺に入る。

十一月二十六日(金)

車は走る。朝八時五十分、アリゾナ州セリグマン驛で食事。こゝから時刻は山中時に變更。晝食はウイリアムス驛。

午後一時四十分、フラグスタフ着。ECスライファ君に迎へられ、自動車で直ちにローエル天文臺に伴はれた。天文臺は町外の「火星丘(マーズヒル)」上にあつて見晴しが好い。北には一萬三千呎のサンフランシスコ峯が聳えて居る。

天文臺では臺長VMスライファ氏に迎えられ、二十四吋の望遠鏡や圖書室内の多くの天體寫眞を見せられた。夕方、食事のため下町へ下り、すぐ又迎えられて天文臺に歸つて、先刻に引き續き多くの天體分光寫眞を說明せられた。午後八時過ぎ、大急ぎ、二十四吋で星圖など見た後、停車場に馳けつけ、九時發のスカウト號に乘る。

——ローエル天文臺には僅か半日の訪問であつたけれど、兩スライファの親切な待遇により、愉快であつたばかりでなく、學術的に非常に力强い暗示を少なからず受けた。殊に彗星と遊星の寫眞及び火星表面學上に最も貴いものを得た。

十一月二十七日(土)

終日、アリゾナ、コロラドの沙漠中を走りつゞける。朝食はアルビュカーク、晝食はラス・ヴイガス、夕食はトリニダド。すべて此のサンタフエ線の食事には列車が適當な驛で特に三十分間停車してくれるので大變氣持よく感じた。——廣々とした野原を旅行して見て、遠い昔バビロニアの牧者たちの原始生活を偲び、單調な地上の景色よりも、美しい天上の星に、自然、其の眼をむけ、そこに天文學が誕生した行き方が今始めて了解されるやうに思ふ。